

塩田津の歴史的概観と建物

塩田津は、現在の佐賀県を含む肥前国蓮池藩の時代の建物が多く残る嬉野市の旧市街です。江戸時代に佐賀藩初代藩主鍋島勝茂（1580～1657）の五男・鍋島直澄大名（1616～1669）が藩主の佐賀藩の支藩として誕生しました。

塩田津は、長崎港から九州北部の小倉までを結ぶ長崎街道の宿場町として栄えました。長崎から日本に入ってきた砂糖がこの道を通して全国に運ばれたことから「シュガーロード」の愛称で呼ばれていました。江戸時代には、「塩田宿」と呼ばれていたことからわかるように、塩田津には旅人のための宿場がありました。

建築

塩田津では現在も伝統的な居蔵造りの町家が見られます。建築の特徴は、屋根の間に三角形の壁が見える瓦屋根が特徴です。この地域の屋根はもともと茅葺きだったが、火災や洪水に弱いために瓦屋根に葺き替えられました。玄関は通常、それぞれの建物の前と後ろの両方にあり、廊下でつながっています。多くの家屋は倉庫として使用され、また商人の住居としても使用されていました。

粘土産業

近くの有明海の干満が大きいことから、塩田津を流れる塩田川は、18世紀初頭に良質な陶石の産地として知られた天草から船で陶石の原石を運ぶのに適していました。陶磁器も生産され、国内外の市場への交易路となりました。このことが地域の貿易を活性化させ、現在の佐賀県南西部の経

済の拠点となったのです。1964 年（昭和 39 年）には、大型クレーンを備えた近代的な港が建設され、船から陶器の石をトラックに積み込み、地域の工房に運ぶことができるようになりました。

公共交通機関

20 世紀初頭には公共交通機関が整備され、明治 38 年には隣の武雄市と祐徳稲荷神社を結ぶ馬車道が建設されたのを皮切りに、現在の武雄市と祐徳稲荷神社の間を結ぶ馬車道が整備されました。これがやがて、1915 年（大正 4 年）にはエンジン式鉄道へと拡張されました。幹線道路の拡幅のために、塩田津の建物の一部を数メートル後退させて、鉄道の建設を可能にしました。